

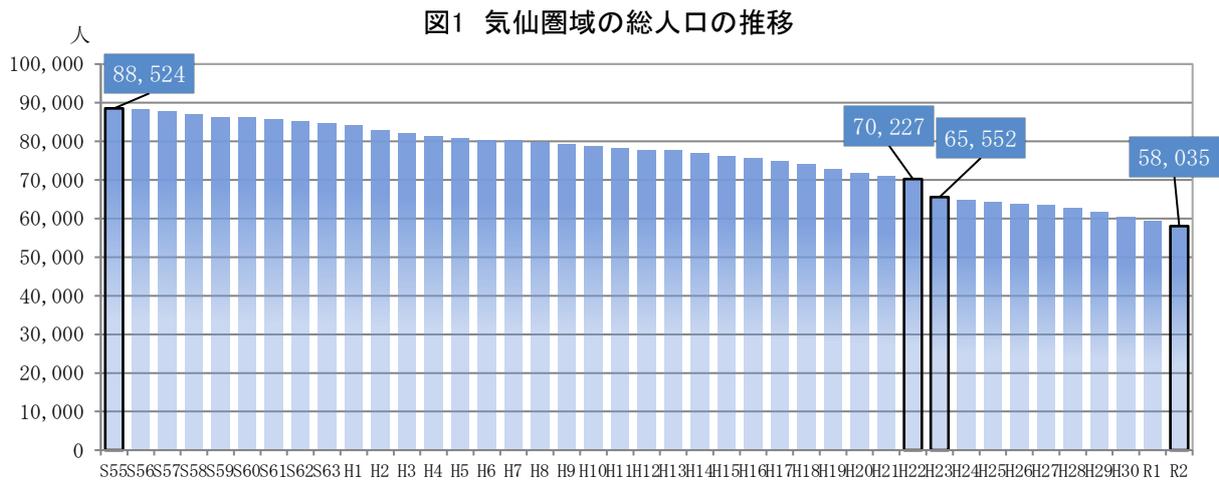
人口動態統計等から見る気仙圏域の状況

※このホームページで用いているデータは、人口動態統計等から得られた数値及びその数値を基に必要な計算を行い算出しています。従って、計算を行うための基となるデータが得られない等の理由で提供データの開始年次に差が生じています。

I 人口の推移

1 総人口の推移

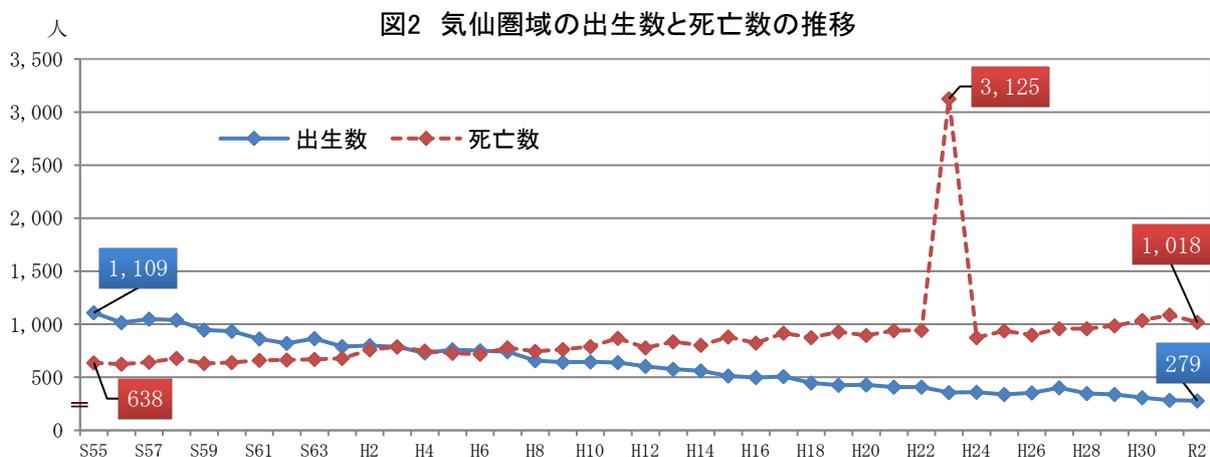
気仙圏域の人口は、昭和55年の88,524人から、令和2年は58,035人と約40年で30,489人減少しています(図1)。平成23年は東日本大震災津波による影響が大きく、平成22年の70,227人から平成23年は65,552人と、4,675人の減となっています(図1)。



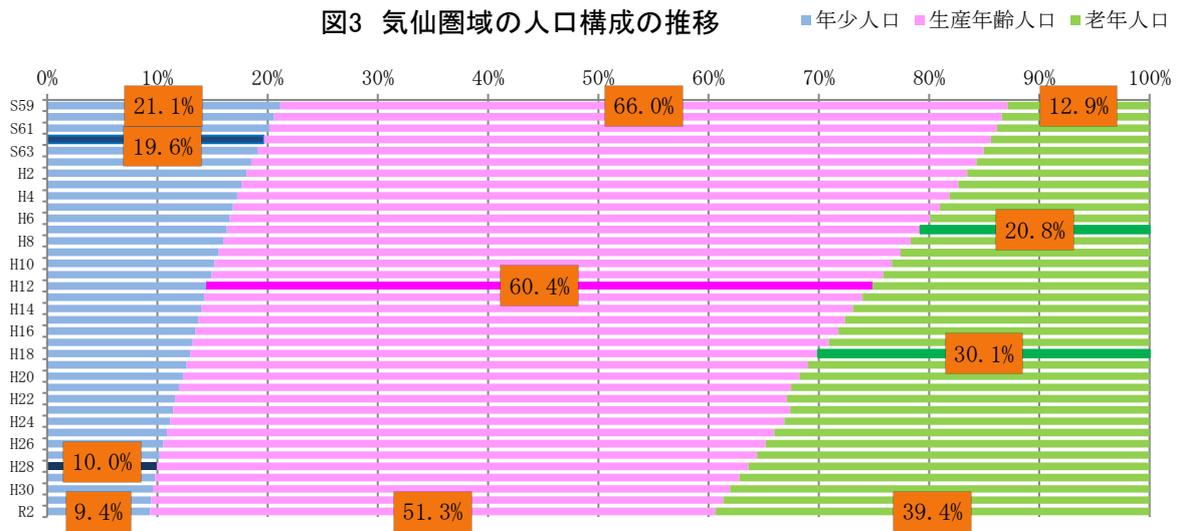
2 人口構成の推移

気仙圏域の1年当たりの出生数は、昭和55年には1,109人でしたが、令和2年は279人と830人減少しました。一方、死亡数は、昭和55年の638人から令和2年は1,018人で、徐々に増加しています。平成23年は東日本大震災津波による不慮の事故死亡数が多く、3,125人となっています(図2)。

出生数から死亡数を差し引いた自然増加数は、平成4年に初めてマイナスに転じ、平成21年以降はその差が年々広がっています。令和2年の自然増加数は739人減でした。



気仙圏域の総人口に占める各区分の割合を昭和59年から経年的に見たものが「図3」です。年少人口は昭和62年に19.6%、平成28年に10.0%となり、令和2年は9.4%まで低下しています。老年人口は平成7年に20.8%、平成18年に30.1%となり、令和2年は39.4%と3人に1人以上が65歳以上という状況です。

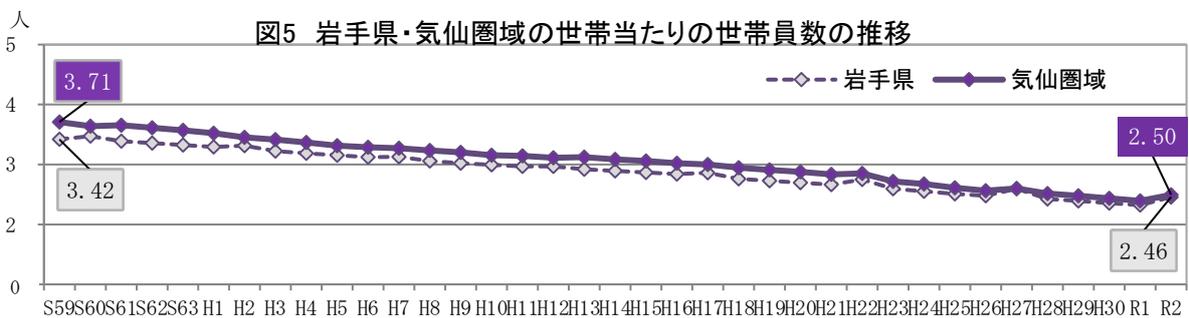
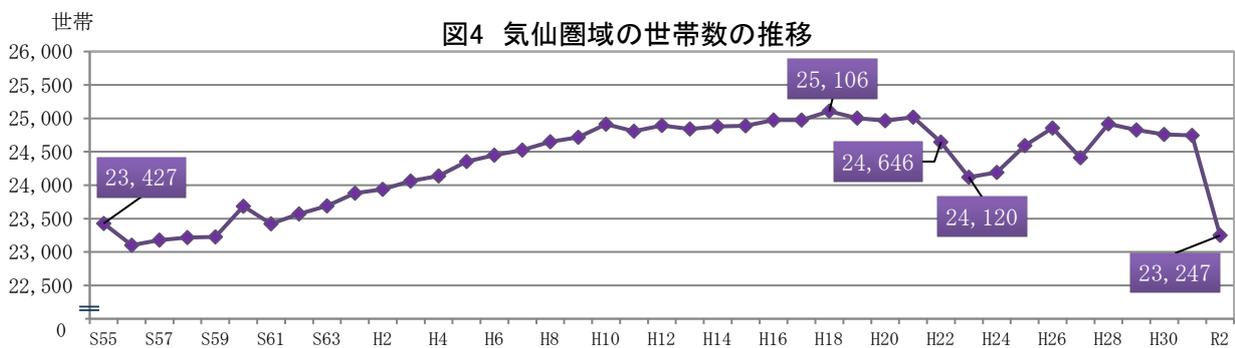


3 世帯数及び世帯当たりの世帯員数の推移

気仙圏域の世帯数は、昭和55年の23,427世帯から平成22年24,646世帯と微増傾向でしたが、平成23年は東日本大震災津波の影響により24,120世帯と最も多かった平成18年の25,106世帯より約1,000世帯減少しています。なお、平成24年から増加したものの、令和2年には23,247世帯と、減少傾向にあります(図4)。

総人口を世帯数で割った世帯当たりの世帯員数は、昭和59年の3.71人から令和2年は2.50人と減少しています(図5)。

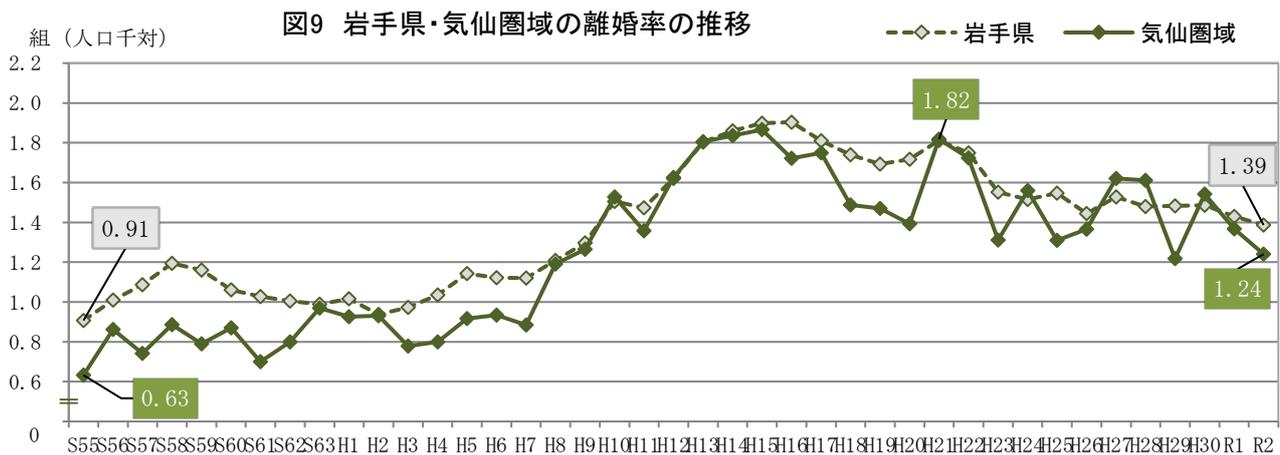
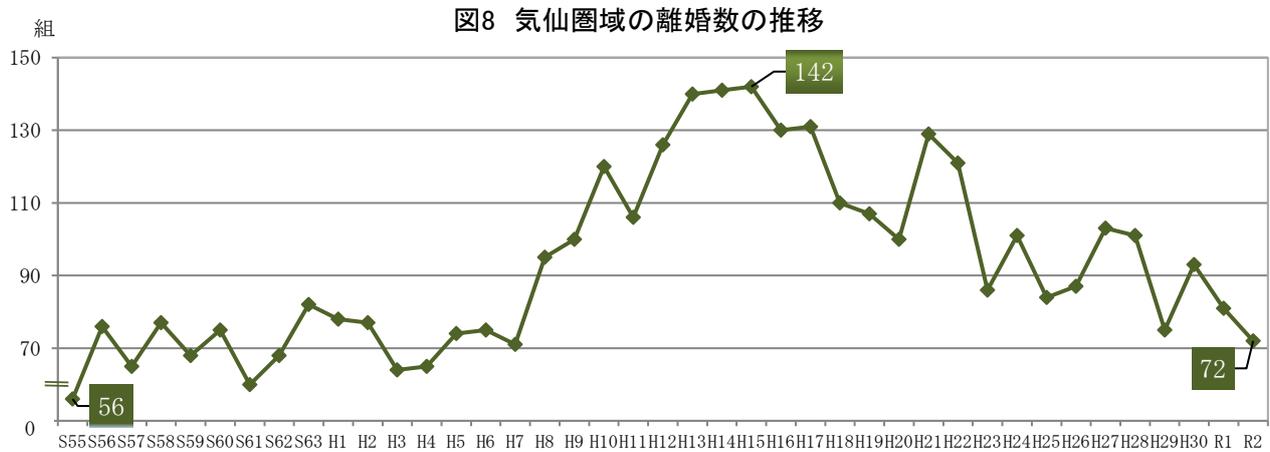
なお、世帯数は国勢調査年は国勢調査による数値、それ以外は住民基本台帳による数値となっています。



3 離婚数及び離婚率の推移

気仙圏域の離婚数は、昭和56年から平成7年までほぼ横ばいで推移していましたが、平成8年から急増し、平成12年から15年をピークに減少傾向となっています。平成21年に再び増加し、増減を繰り返しながら、令和2年は72組でした(図8)。

人口千人当たりの離婚率は、婚姻率と同様にほぼ岩手県全体より低く推移しており、令和2年は1.24と岩手県全体の1.39を下回りました(図9)。



4 離婚率の圏域別順位 (令和2年低率順)

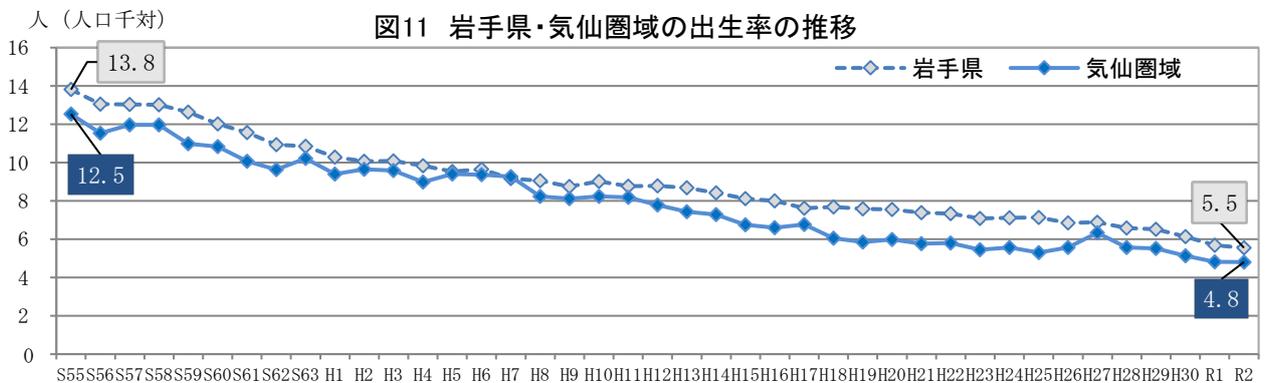
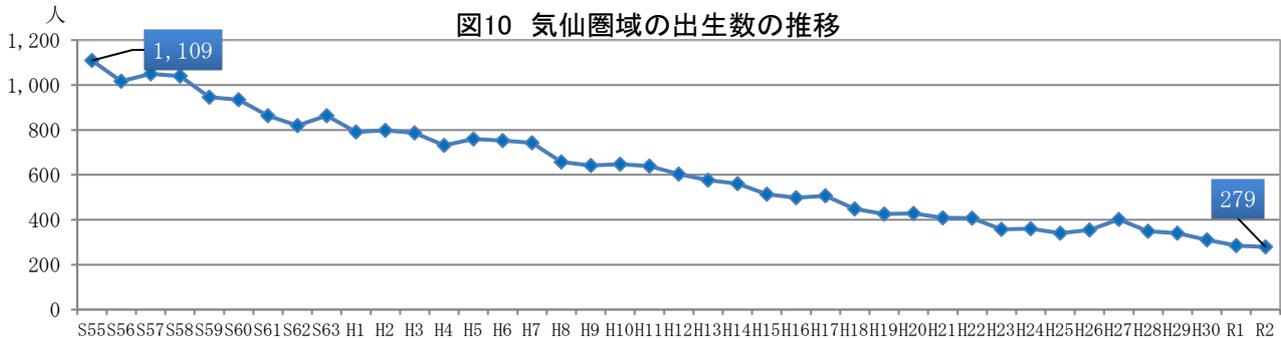
	岩手県	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位
圏域名		釜石	久慈	二戸	気仙	両磐	盛岡	中部	宮古	胆江
離婚率	1.39	1.07	1.12	1.20	1.24	1.33	1.39	1.42	1.60	1.61

Ⅲ 出生、周産期死亡、死産、乳児死亡等の推移

1 出生数及び出生率の推移

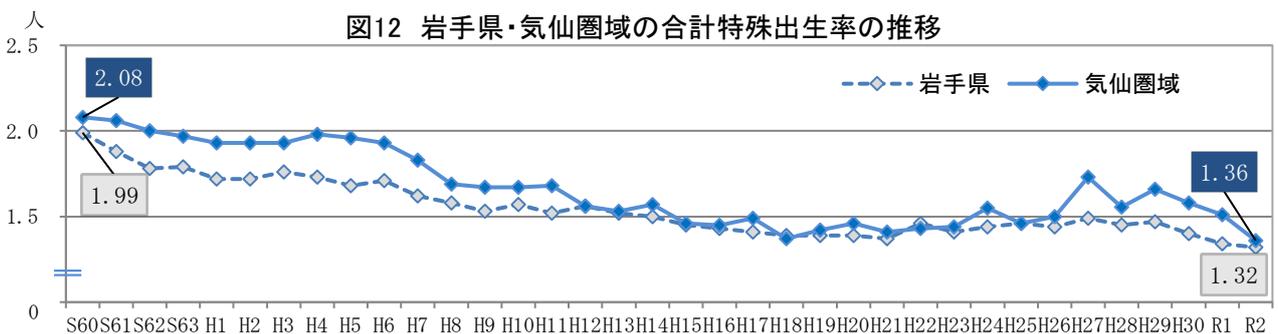
気仙圏域の出生数は、昭和55年に1,109人から緩やかに減少傾向を示し、令和2年には279人と830人減少しています(図10)。

人口千人当たりの出生率も、昭和55年の12.5から減少傾向を示し、令和2年は4.8と低下しました。いずれの年次も岩手県全体より低く推移しています(図11)。



2 合計特殊出生率の推移

一人の女性が一生に産む子どもの数を表す指標の合計特殊出生率について、気仙圏域は昭和60年の2.08から平成18年にかけて低下していましたが、平成19年以降は横ばいから緩やかな上昇傾向となり、令和2年は1.36でした。合計特殊出生率は平成12年から岩手県に近い率で推移していましたが、近年は県を上回るようになってきています。(図12)。



3 合計特殊出生率の圏域別順位 (令和2年高率順)

	岩手県	1位	3位	4位	5位	6位	8位	9位		
圏域名		胆江	宮古	気仙	久慈	両磐	盛岡	中部	二戸	釜石
合計特殊出生率	1.32	1.44	1.44	1.36	1.35	1.34	1.30	1.30	1.19	1.17

4 周産期死亡数・率の推移

妊娠満22週以降の死産（以下、「後期死産」と言います。）及び出生後満7日未満の死亡（以下、「早期新生児死亡」と言います。）を周産期死亡と言います。周産期死亡率は、出産（出生数と妊娠満22週以後の死産数の合計）千対の率です。

気仙圏域の周産期死亡数は、昭和57年の16人から平成3年、4年に2人まで減少しましたが、平成9年は10人に増加し、平成10年以降は6人以下で推移しています。令和2年は0でした。また、平成15年以降の早期新生児死亡数は、平成24年と26年の各1人だけです（図13）。

周産期死亡率は、昭和57年と平成9年に高くなっています。岩手県全体と比較すると、気仙圏域の方が高い年次が多くなっていますが、近年では平成22年から24年、27年、28年、令和元年、令和2年は岩手県全体より低い状況です。令和2年は0.0でした（図14、図15）。

図13 気仙圏域の周産期死亡数の推移

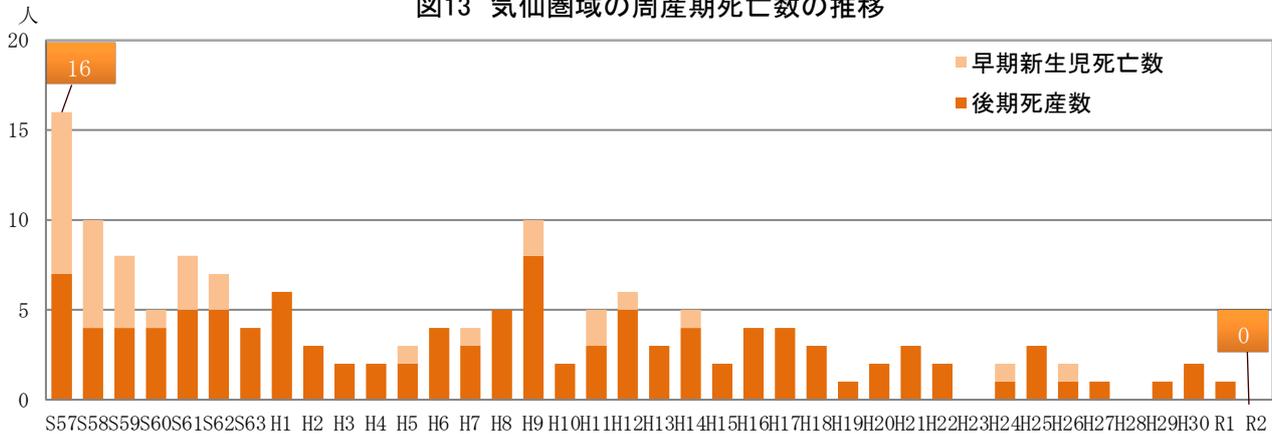


図14 気仙圏域の周産期死亡率の推移

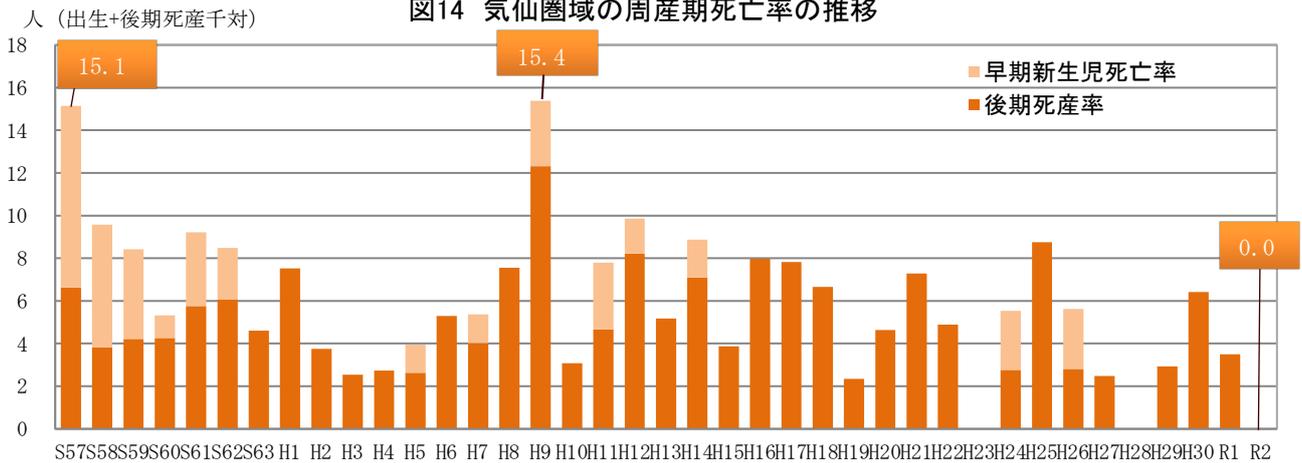
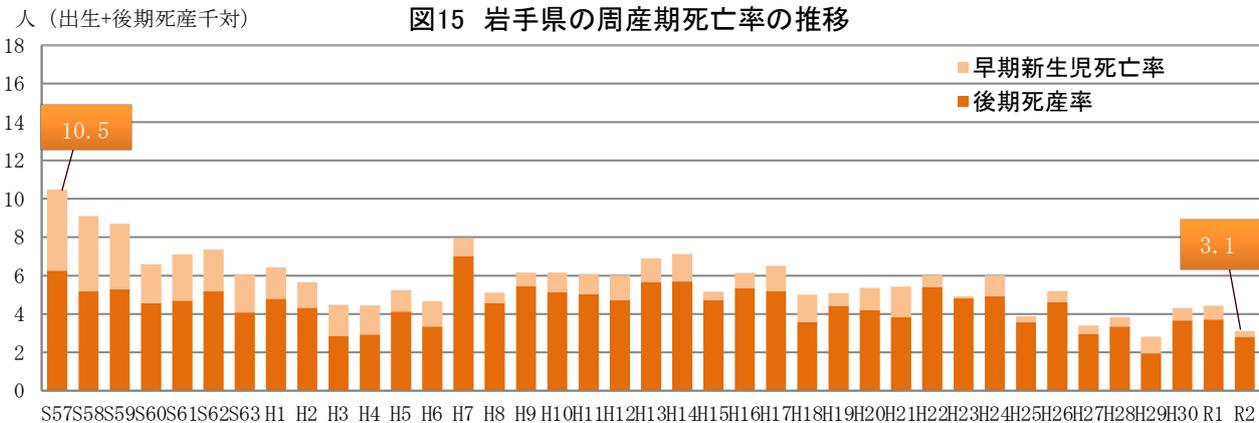


図15 岩手県の周産期死亡率の推移



5 死産数・率の推移

気仙圏域の死産数は、昭和55年の47人から昭和56年には59人に増加しましたが、翌年から減少傾向となり、増減を繰り返しながら概ね減少傾向にありました。令和2年は9人でした。内訳として、自然死産と人工死産がほぼ同数もしくは自然死産が人工死産を上回っている年次が多く見られます(図16)。

出産千人当たりの死産率は、昭和55年から平成10年まで30.0を超えて推移し、11年以降は大きく上昇と低下を繰り返しています。令和2年は31.3となり、岩手県全体を上回りました(図17、図18)。

図16 気仙圏域の死産数の推移

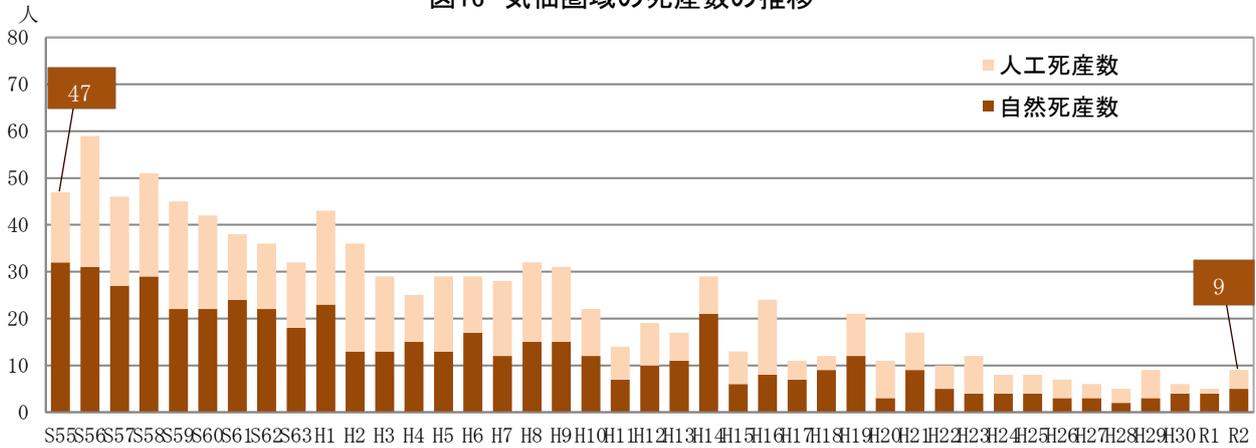


図17 気仙圏域の死産率の推移

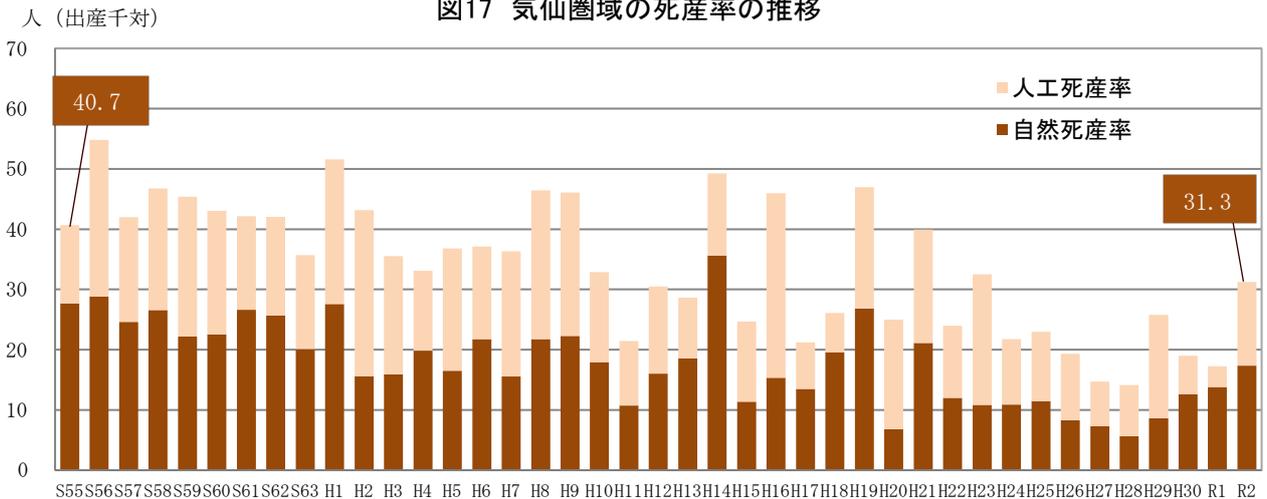
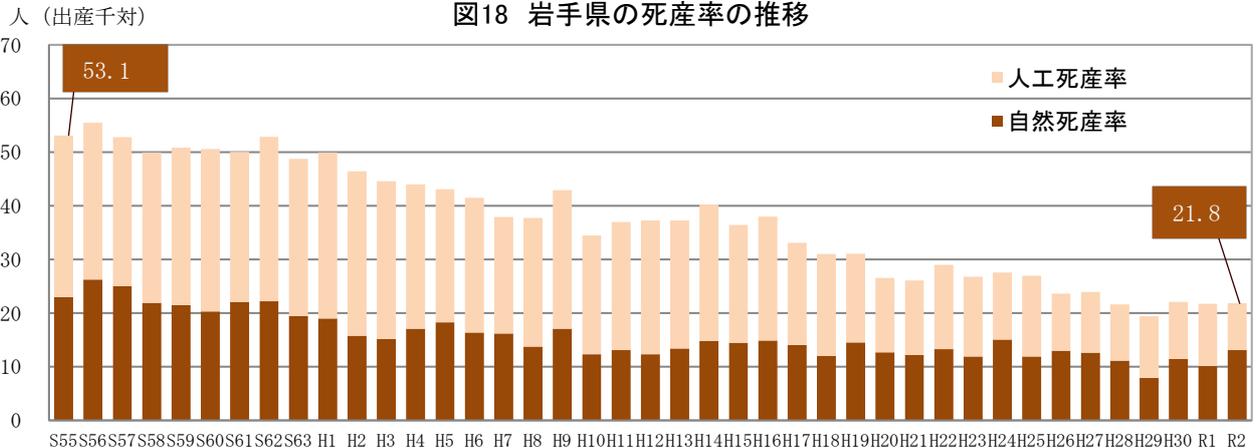


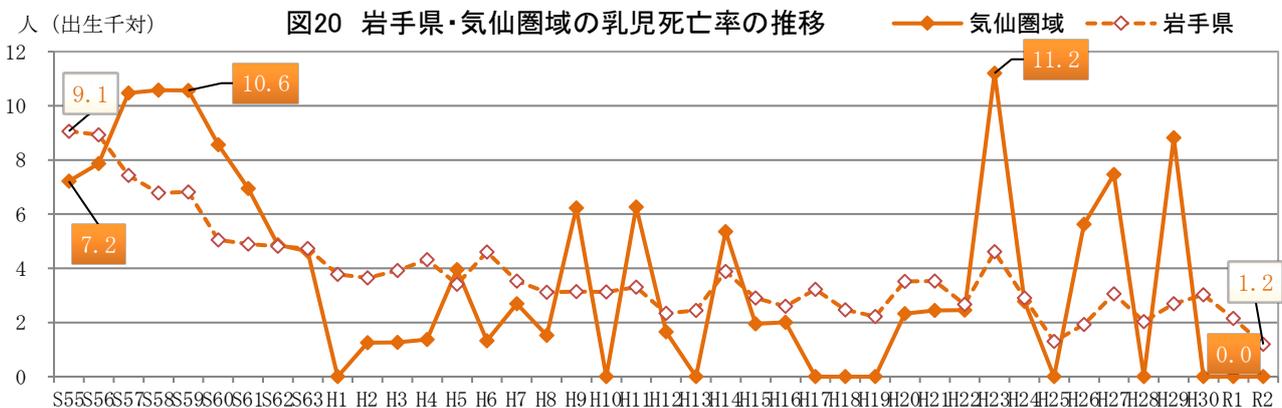
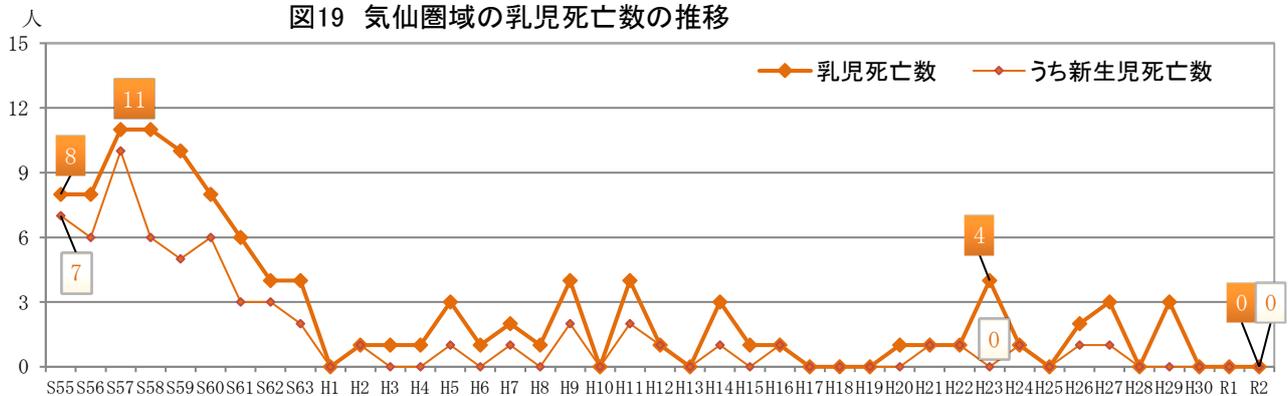
図18 岩手県の死産率の推移



6 乳児死亡数・率の推移

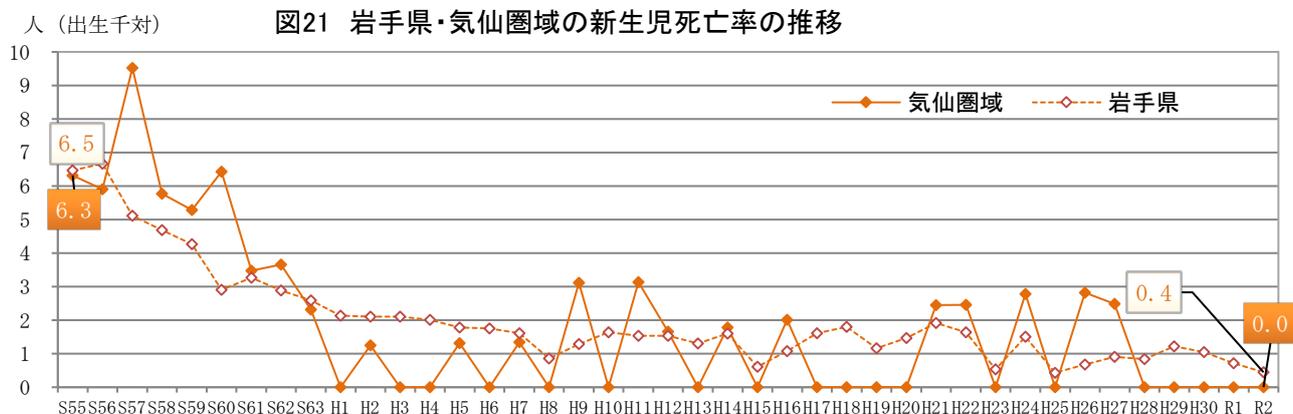
気仙圏域の乳児死亡数は、昭和55年の8人から昭和57年～58年が11人とピークとなり、昭和62年から4人以下で推移し令和2年は0でした(図19)。

また、乳児死亡数のうち生後4週間未満(新生児)の死亡は、昭和55年の7人から平成元年以降は2人以下で推移しています(図19)。 出産千人当たりの乳児死亡率は、大きな幅で上昇と低下を繰り返してきました。平成23年は11.2と高率ですが、東日本大震災津波の影響を考慮する必要があります(図20)。



7 新生児死亡率の推移

気仙圏域の出生千人当たりの新生児死亡率は、昭和55年の6.3から昭和63年以降はおよそ3.0以下で推移し、令和2年は0.0でした(図21)。近年では平成21年、22年、24年、26年、27年が岩手県全体より高くなっています。

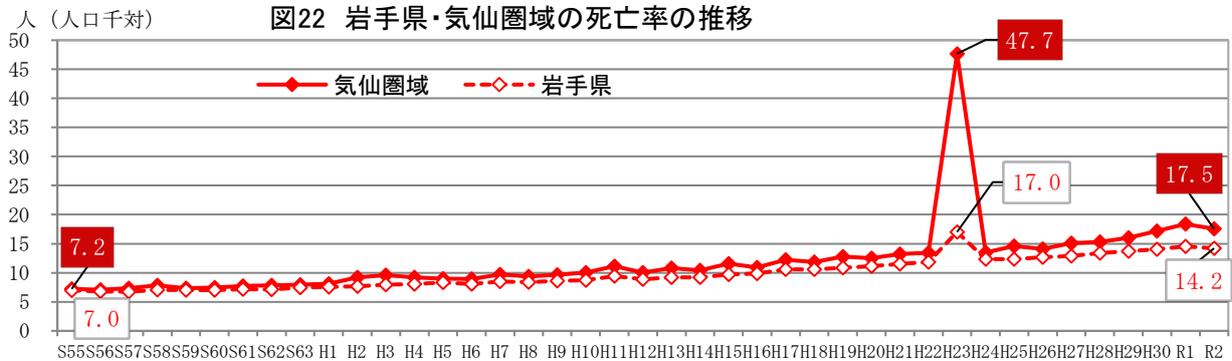


IV 死亡の推移

1 死亡率の推移

気仙圏域の死亡数が増加していることは前述のとおりです(図2)が、人口千人当たりの死亡率は、昭和55年の7.2から緩やかな上昇傾向にあり、令和2年には17.5に上昇しています。平成23年を除いて、岩手県全体と同程度で推移しています。

なお、平成23年は東日本大震災津波による不慮の事故の死亡が多いため、気仙圏域は岩手県全体よりはるかに高くなっています(図2)。



2 年齢調整死亡率の推移

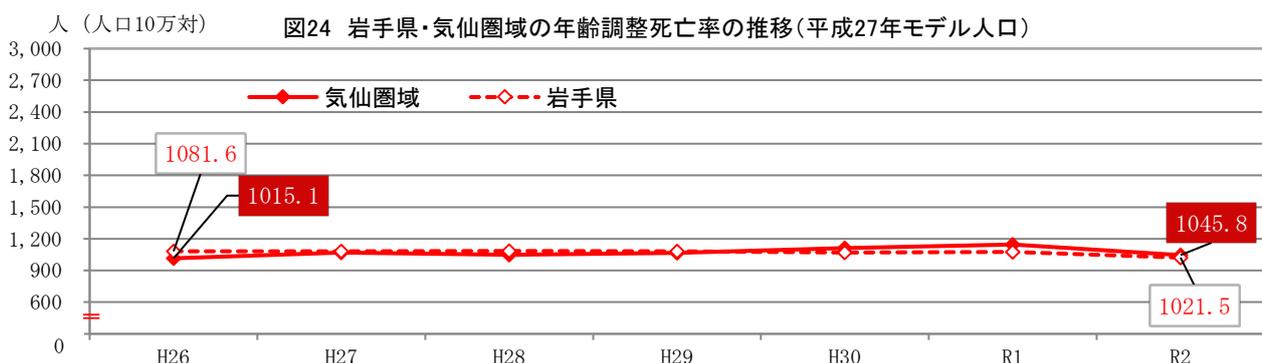
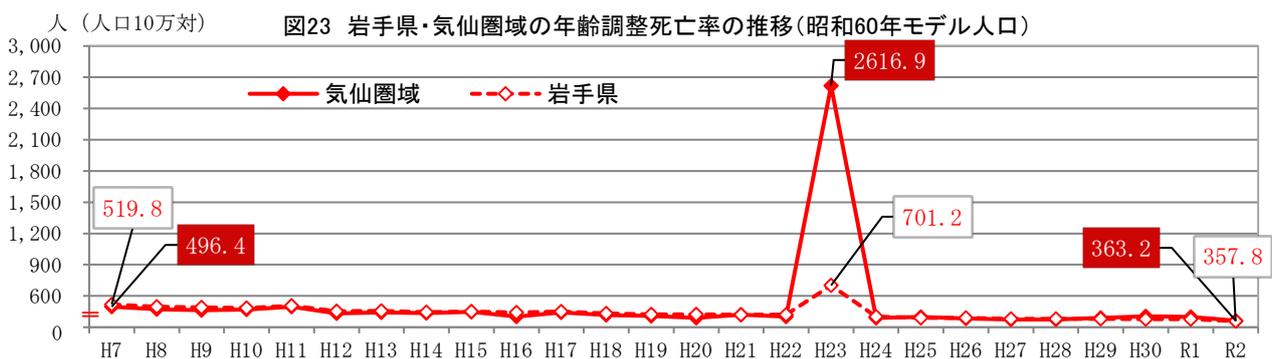
(図23)の人口10万人当たりの年齢調整死亡率※で見ると、気仙圏域は平成7年は496.4で令和2年は363.2でした。平成23年は東日本大震災津波による不慮の事故死亡が多く、2616.9と高率となっています。

なお、(図23)(図24)を見ると、年ごとの変動はあるものの、概ね岩手県全体に近い死亡率で推移しています。令和2年はやや高く推移しています。

※年齢調整死亡率: 年齢構成の異なる地域間で死亡の状況を比較できるように年齢構成を調整した死亡率が年齢調整死亡率(人口10万人当たり)です。年齢調整死亡率は、従来昭和60年モデル人口(国勢調査人口を基に補正した人口)を使用した数値を掲載していましたが、令和4年2月25日に厚生労働省が「年齢調整死亡率の基準人口について」を改訂し、新たに平成27年モデル人口(国勢調査人口を基に補正した人口)を使用することとなりました。この基準人口改訂は、近年の高齢化による人口構成の変化を反映したものとなっています。

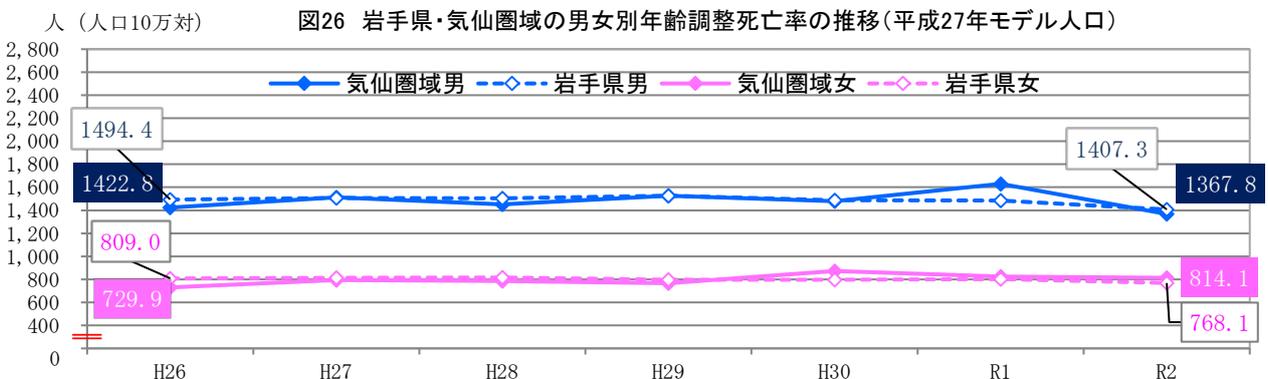
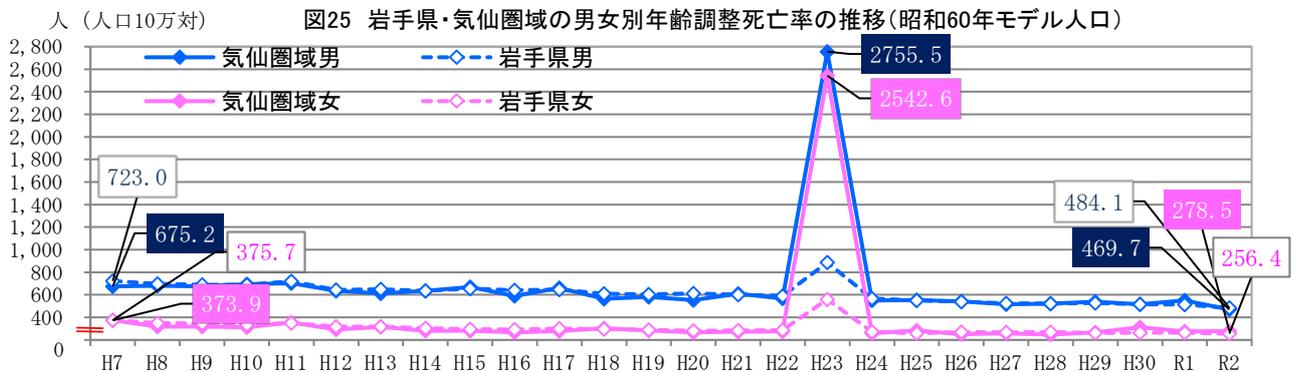
なお、県や市町村の健康増進計画等で使用している年齢調整死亡率は、昭和60年モデル人口を使用した数値を用いており、継続した経年比較や傾向把握が必要であることから、従来に引き続き昭和60年モデル人口を使用した数値を掲載しています。また、新たな県の健康増進計画との比較を考慮し、現行計画の期間(平成26年～令和5年)分について、平成27年モデル人口を使用した数値も掲載しています。

岩手県の年齢調整死亡率は不詳人口を按分して算出、気仙圏域は不詳人口を除いて算出しています。



3 男女別年齢調整死亡率の推移

年齢調整死亡率は、男女で大きく異なることから、男女別で(図25)(図26)に示します。
 (図25)を見ると、気仙圏域の男性は、平成7年の675.2から令和2年は469.7にまで低下しています。女性は、平成7年の373.9から令和2年は278.5にまで低下して推移していることがわかります。
 なお、(図25)(図26)を見ると、気仙圏域は岩手県全体とほぼ同程度で推移しています。男性は女性の約2倍前後の値で推移し、男性の死亡率が高い状況です。



4 年齢調整死亡率の死因別順位

死因別の年齢調整死亡率について、岩手県・気仙圏域の男女別にその値を求め、死因毎に値の高い順に5位までを下表に示しています。

区分(昭和60年モデル人口)		第1位	第2位	第3位	第4位	第5位	
令和2年	男性	岩手県	死因	悪性新生物	心疾患	脳血管疾患	自殺
		年齢調整死亡率	153.9	67.7	51.0	25.1	21.1
	女性	岩手県	死因	悪性新生物	心疾患	脳血管疾患	老衰
		年齢調整死亡率	92.2	33.2	25.7	17.3	11.3
気仙圏域	死因	悪性新生物	心疾患	脳血管疾患	肺炎	不慮の事故	
	年齢調整死亡率	165.2	70.9	43.6	18.7	18.3	

区分(平成27年モデル人口)		第1位	第2位	第3位	第4位	第5位	
令和2年	男性	岩手県	死因	悪性新生物	心疾患	脳血管疾患	肺炎
		年齢調整死亡率	411.6	213.0	147.2	85.0	82.8
	女性	岩手県	死因	悪性新生物	心疾患	老衰	脳血管疾患
		年齢調整死亡率	214.4	121.6	88.1	84.3	29.6
気仙圏域	死因	悪性新生物	脳血管疾患	心疾患	老衰	肺炎	
	年齢調整死亡率	425.6	246.5	128.1	72.2	69.7	

＜参考＞令和2年死因別死亡数順位

岩手県・気仙圏域の男女別に死因毎の死亡数の多い順から5位までを示しています。

岩手県と気仙圏域で比較すると、男性は第1位「悪性新生物」から第5位「老衰」まで同じ順位となっております。女性は第1位「悪性新生物」は同じ順位となっておりますが、第2位は岩手県は「心疾患」で気仙圏域は「脳血管疾患」、第3位は岩手県は「老衰」で気仙圏域は「心疾患」、第4位は岩手県は「脳血管疾患」で気仙圏域は「老衰」、第5位は「肺炎」で同じ順位となっております。

区分		第1位	第2位	第3位	第4位	第5位	
令和2年	男性	岩手県	死因 悪性新生物	心疾患	脳血管疾患	肺炎	老衰
		死亡数	2,562	1,254	889	487	428
	気仙圏域	死因	悪性新生物	心疾患	脳血管疾患	肺炎	老衰
		死亡数	152	84	46	26	22
女性	岩手県	死因	悪性新生物	心疾患	老衰	脳血管疾患	肺炎
		死亡数	2,019	1,477	1,312	987	381
	気仙圏域	死因	悪性新生物	脳血管疾患	心疾患	老衰	肺炎
		死亡数	125	86	79	69	28

5 悪性新生物の岩手県・気仙圏域の男女別年齢調整死亡率の推移

「悪性新生物」について、岩手県全体・気仙圏域の男女別年齢調整死亡率の推移を(図27)(図28)に示します。

(図27)を見ると、気仙圏域では、男性は平成7年が183.7と岩手県全体の209.7より低率でしたが、翌年から岩手県全体より高い死亡率となっており(平成13年、15年、16年を除く)、令和2年は165.2と岩手県全体より高く推移しています。女性は、平成7年から岩手県全体に近い死亡率で推移し、平成23年からは上昇傾向となっており、岩手県全体との差が開いている状況でした。平成26年は低下し、岩手県全体より低い死亡率となりましたが、平成30年は122.3と高く推移しています。令和2年は87.1と岩手県全体より低い死亡率でした。

(図28)を見ると、気仙圏域の男性はどの年次も岩手県全体より高く推移しています。女性は年ごとの変動はあるものの、令和2年は岩手県全体より高く推移しています。

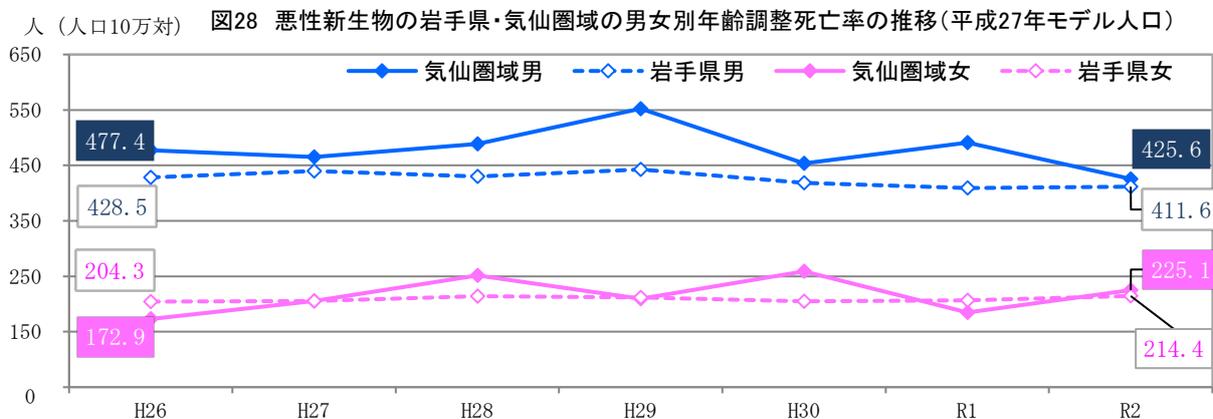
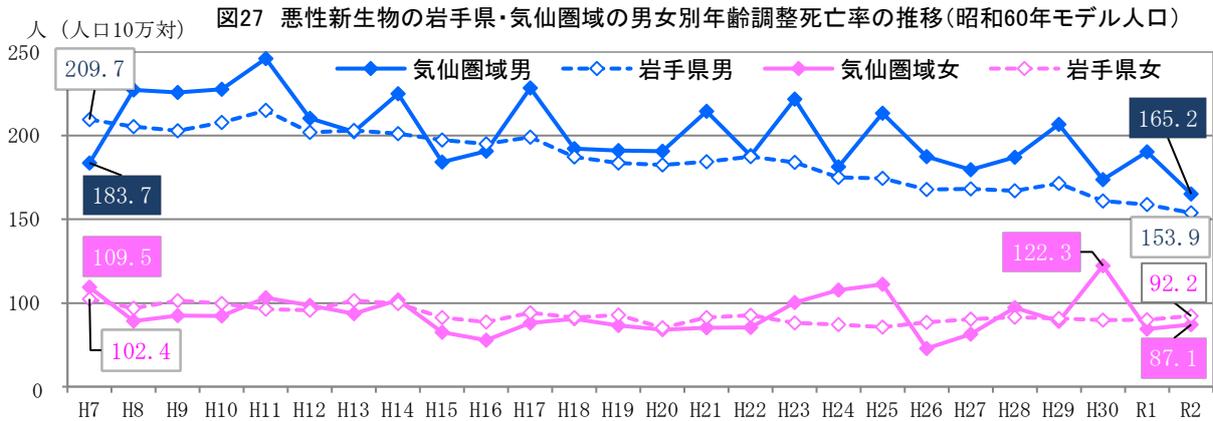


表1 悪性新生物の部位別年齢調整死亡率の順位

悪性新生物の部位別年齢調整死亡率について、令和2年の岩手県・気仙圏域の男女別にその値を求め、値の高い順から3位までを下表に示しています。

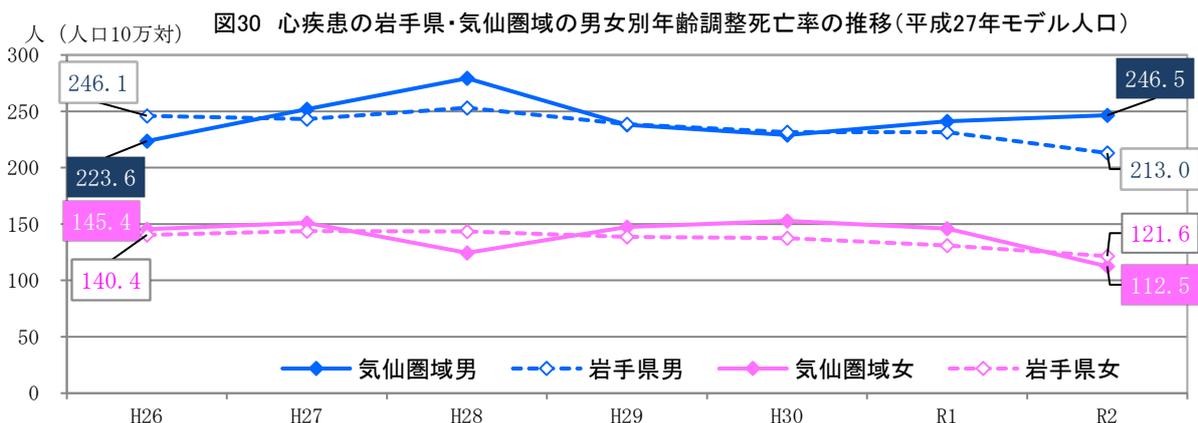
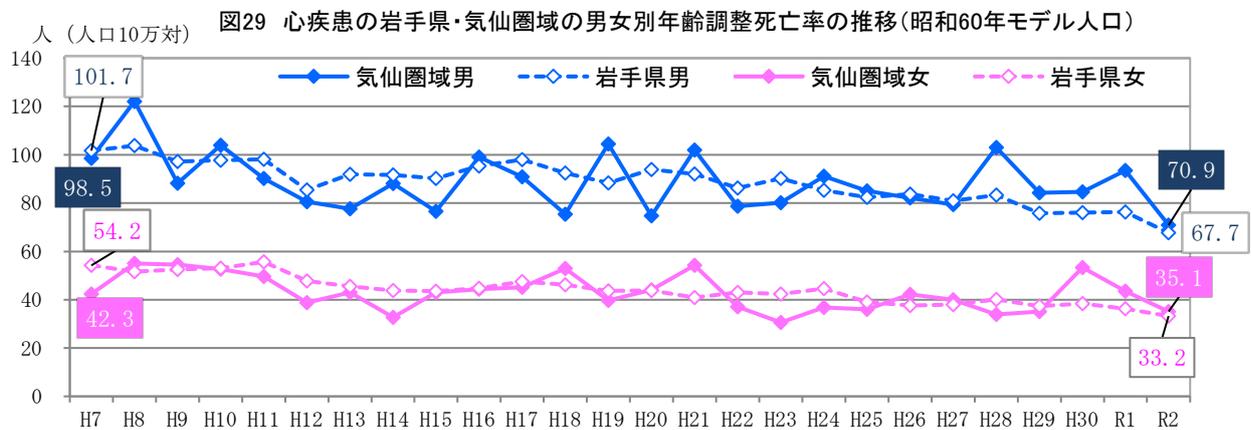
		区分(昭和60年モデル人口)		第1位	第2位	第3位
		令和2年	男性	岩手県	死因	肺
	年齢調整死亡率			35.2	26.0	20.6
気仙圏域	死因		肺	大腸	胃	
	年齢調整死亡率		36.1	25.8	22.0	
女性	岩手県	死因	大腸	乳	肺	
		年齢調整死亡率	14.5	13.4	9.4	
	気仙圏域	死因	大腸	肺	乳	
		年齢調整死亡率	11.2	11.0	9.7	
		区分(平成27年モデル人口)		第1位	第2位	第3位
令和2年	男性	岩手県	死因	肺	大腸	胃
			年齢調整死亡率	93.5	66.2	55.2
	気仙圏域	死因	肺	胃	大腸	
		年齢調整死亡率	95.3	71.0	69.5	
女性	岩手県	死因	大腸	肺	乳	
		年齢調整死亡率	37.8	26.0	23.1	
	気仙圏域	死因	大腸	肺	乳	
		年齢調整死亡率	34.0	30.8	18.1	

6 心疾患の岩手県・気仙圏域の男女別年齢調整死亡率の推移

「心疾患」について、岩手県全体・気仙圏域の男女別年齢調整死亡率の推移を(図29)(図30)に示します。

(図29)を見ると、気仙圏域では、男性は平成7年から大きく上下を大きく繰り返して推移していました。近年では岩手県全体に近い死亡率となっていました。平成28年以降は県の値を上回っています。令和2年は70.9と岩手県全体より高く推移しています。女性はほぼ横ばいであり、平成28年、29年は岩手県全体を下回りましたが、平成30年からは上昇に転じています。令和2年は35.1と岩手県全体より高く推移しています。

(図30)を見ると、気仙圏域の男性は年ごとの変動はあるものの、令和2年は岩手県全体より高く推移しています。女性は岩手県全体より高く推移している年次が多いですが、令和2年は岩手県全体より低く推移しています。

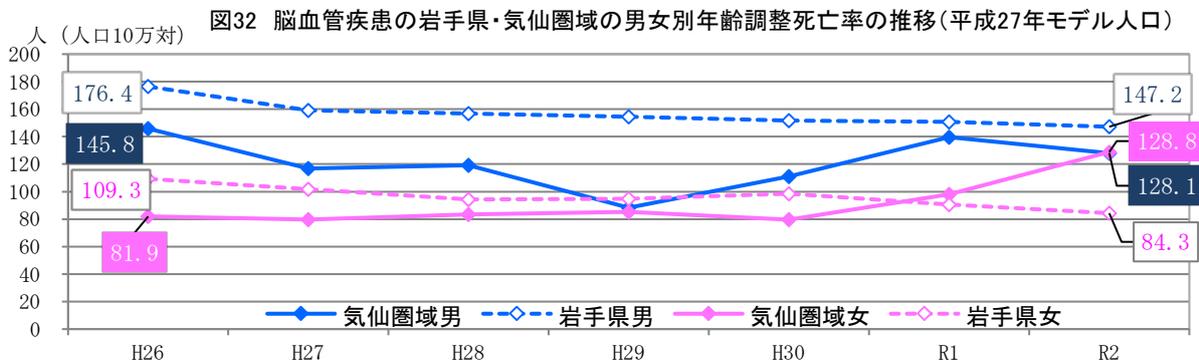
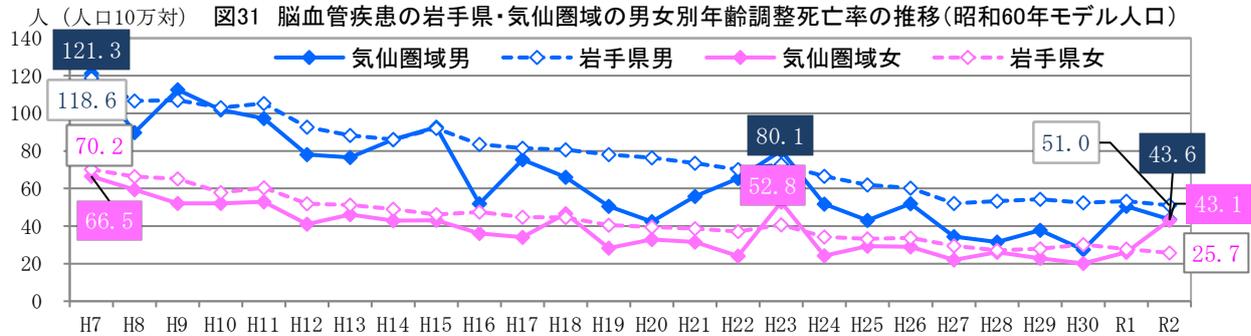


7 脳血管疾患の岩手県・気仙圏域の男女別年齢調整死亡率の推移

「脳血管疾患」について、岩手県全体・気仙圏域の男女別年齢調整死亡率の推移を(図31)(図32)に示します。

(図31)を見ると、気仙圏域では、男性は平成7年から上昇と低下を繰り返しながら低下傾向にあり、平成7年、9年、23年を除いて岩手県全体より低く推移しています。令和2年は43.6と岩手県全体より低く推移しています。女性も平成7年から低下傾向にあり、岩手県全体より低く推移していましたが、平成23年は52.8と急上昇しました。平成23年以降は、岩手県全体より低く推移していましたが、令和2年は43.1と岩手県全体より高く推移しています。なお、気仙圏域では男女とも平成23年が高くなっていますが、東日本大震災津波の影響を考慮する必要があります。

(図32)を見ると、気仙圏域の男性はどの年次も岩手県全体より低く推移しています。女性は岩手県全体より低く推移している年次が多いですが、令和2年は岩手県全体より高く推移しています。

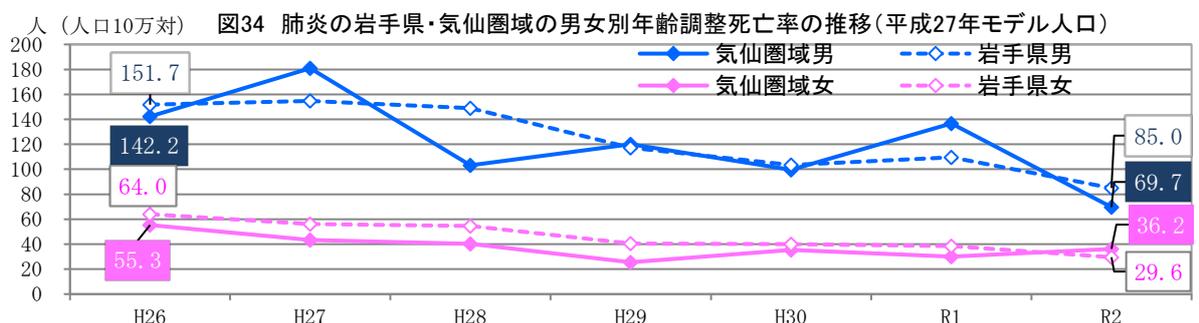
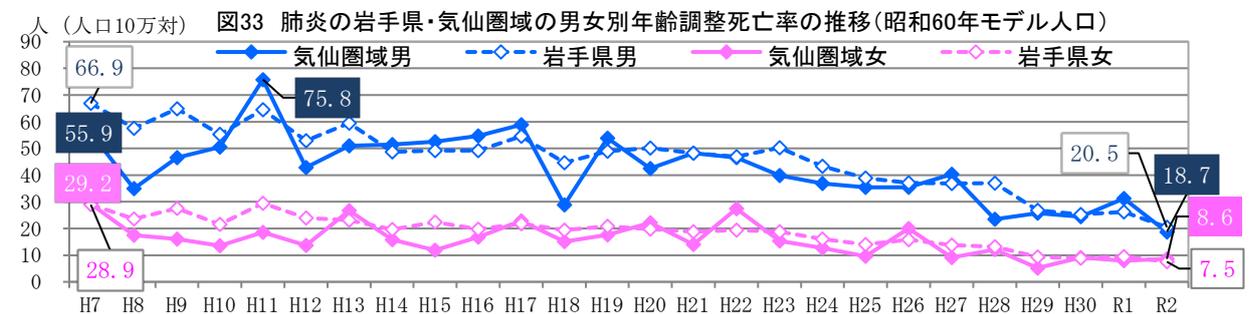


8 肺炎の岩手県・気仙圏域の男女別年齢調整死亡率の推移

「肺炎」について、岩手県全体・気仙圏域の男女別年齢調整死亡率の推移を(図33)(図34)に示します。

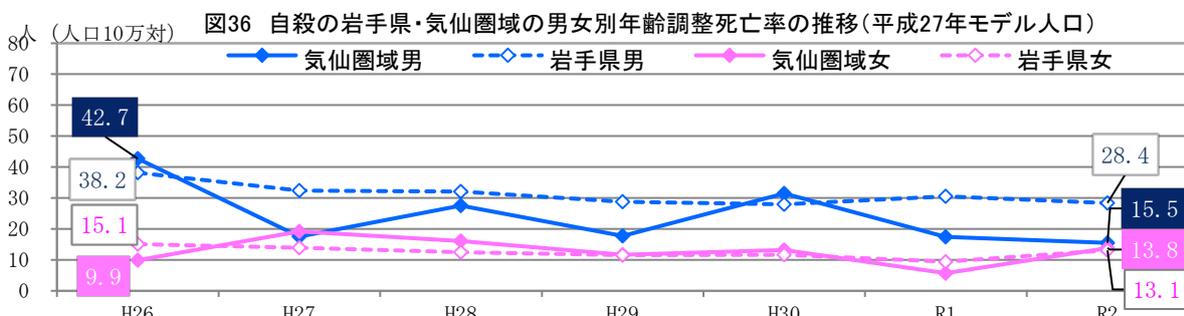
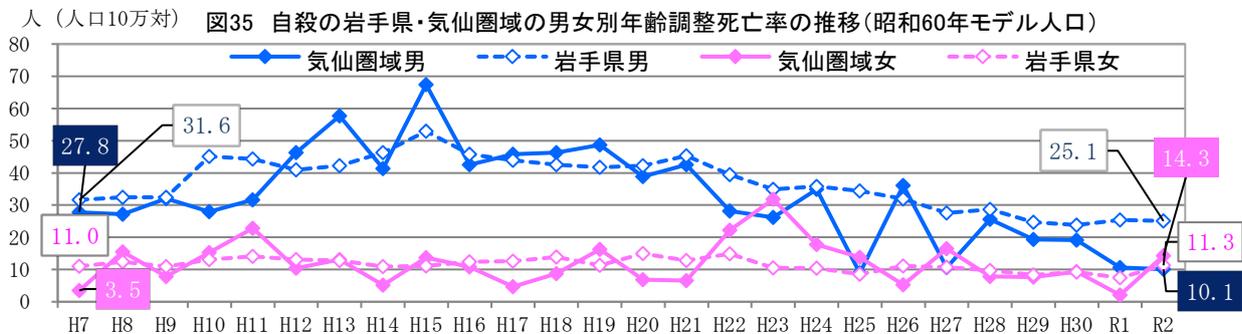
(図33)を見ると、気仙圏域では、男性は平成8年、18年に大きく低下し、平成11年が75.8と最も高くなっています。平成20年からは概ね岩手県全体より低く推移しています。令和2年は18.7と岩手県全体より低く推移しています。女性は、岩手県全体より低く推移していましたが、平成13年、22年、26年、30年、令和2年は岩手県全体より高い死亡率でした。令和2年は8.6となっています。

(図34)を見ると、気仙圏域の男性は年ごとの変動はあるものの、令和2年は岩手県全体より低く推移しています。女性は岩手県全体より低く推移している年次が多いですが、令和2年は岩手県全体より高く推移しています。



9 自殺の岩手県・気仙圏域の男女別年齢調整死亡率の推移

「自殺」について、岩手県全体・気仙圏域の男女別年齢調整死亡率の推移を(図35)(図36)に示します。
 (図35)を見ると、気仙圏域では、男性は平成13年、15年に大きな山があり、平成17年から19年は岩手県全体より高い死亡率となりました。平成20年以降は岩手県全体より低く推移していますが(平成26年を除く)、大きく上昇と低下を繰り返しており、令和2年は10.1と低く推移しています。女性は平成21年から23年にかけて急な上昇がみられましたが、その後増減しながら推移し、令和2年は14.3と岩手県全体より高く推移しています。
 (図36)を見ると、気仙圏域の男性は年ごとの変動はあるものの、令和2年は岩手県全体より低く推移しています。女性は岩手県全体より高く推移している年次が多く、令和2年は岩手県全体より高く推移しています。



10 老衰の岩手県・気仙圏域の男女別年齢調整死亡率の推移

「老衰」について、岩手県全体・気仙圏域の男女別の年齢調整死亡率の推移を(図37)(図38)に示します。
 (図37)を見ると、男女とも大きく上下しながら推移してきました。男性は、近年は県全体より低い傾向(令和元年を除く)にあり、令和2年は10.4と低く推移しています。女性は概ね県全体より高い値を示していますが、令和2年は16.1とやや低く推移しています。
 (図38)を見ると、気仙圏域は年ごとの変動はあるものの、令和2年は男女ともに岩手県全体より低く推移しています。

